慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	有沢広巳編 統計 (毎日ライブラリー)
Sub Title	
Author	佐藤, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.1 (1956. 1) ,p.57(57)- 60(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19560101-0057
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560101-0057

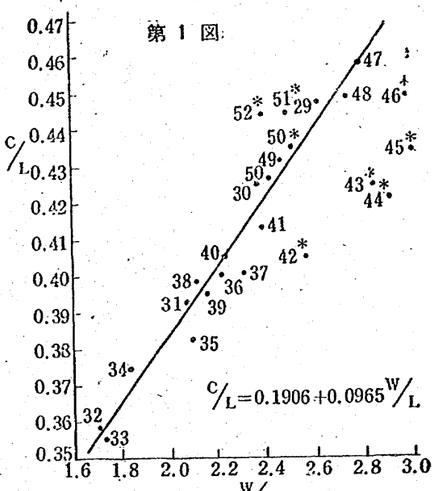
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第 1 表　消費，富，賃金率の關係

年度	GPN	EPN	LP	P 1935−9=1	N	CPN	0.0965R	WPN	A/E
	回歸線に使用した資料								
	十億ドル	十億ドル			十億人	十億ドル	十億ドル	十億ドル	
1929	55.0	29.67	1415	1.225	0.1218	77.4	76.5	452	11.3
30	56.4	25.71	1374	1.194	.1231	72.0	70.9	400	12.6
31	55.7	20.55	1294	1.087	.1240	63.2	62.5	331	14.0
32	54.0	14.40	1146	0.976	.1248	51.4	51.1	247	17.5
33	54.8	13.40	1070	0.924	.1256	47.7	48.2	234	17.9
34	56.3	15.14	1113	0.957	.1264	52.8	51.8	259	16.6
35	59.3	18.56	1154	0.981	.1273	56.4	57.7	308	13.8
36	64.3	20.88	1206	0.991	.1281	61.9	62.6	344	12.5
37	69.2	23.36	1286	1.027	.1288	66.6	68.4	382	11.9
38	72.7	20.38	1262	1.008	.1298	65.6	64.6	345	13.6
39	77.9	21.65	1303	0.994	.1309	67.6	68.0	368	13.0
40	84.8	23.20	1337	1.002	.1320	71.7	71.8	395	12.7
41	94.6	28.07	1476	1.052	.1332	81.4	82.8	470	11.2
47	302.1	50.62	2435	1.592	.1440	161.4	161.3	979	10.5
48	307.6	56.60	2659	1.712	.1465	175.3	177.0	1065	10.7
49	317.2	51.83	2758	1.691	.1492	178.1	176.0	1011	12.1
50	323.0	55.40	2895	1.712	.1518	188.1	186.5	1064	11.9
	（回歸線に使用せざる資料）								
1942	120.0	35.46	1714	1.165	.1347	93.8	101.4	595	9.8
43	169.4	39.71	1807	1.236	.1365	105.1	114.6	701	9.2
44	224.0	42.29	1968	1.255	.1381	114.9	128.0	790	8.9
45	268.2	44.23	2049	1.284	.1396	125.0	137.5	860	9.0
46	293.9	49.36	2249	1.393	.1413	143.1	152.7	954	11.5
50（修正）	323.0	57.25	2913	1.719	.1517	191.8	189.3	1089	11.5
51	325.8	62.75	3063	1.856	.1543	210.3	202.5	1165	—
52	333.9	63.67	3183	1.898	.1569	221.8	209.6	1186	—

第 1 図



＊印　回帰線計算に使用せず

の重要度が年に約六分の一ずつ減少して行くことが解る。もし豫想賃金の割引率が相當に高いものになるとすれば、人間價値の決定において利子率を無視しても良いことになるが、他方において近い將來の失業に關する豫想を無視できなくなる。しかし豫想される失業率と正常失業率の差は、現在の失業率は正常時の六分の五程度のものであるから、人間價値の指標として賃金率よりも勞働所得をとるべきだとの結論に達するまでには至らない。しかしこの方程式によつて一九五一、二年の値を豫測すると三・七%乃至五・五%の過少評價となる。この時期に異常な要因が作用したとは思われないし、消費と富及び賃金率の關係がその様な短期間に變化したとも思われない。從つてかかる結果が生れた原因は恐らくEの富に對する比率が變化したためと考えられる。

以上がハンバーガーの論文の要旨である。flow としての消費が flow としての所得のみに依存せず stock としての富の額によつても左右されるとするのが最近の傾向であることは前述した通りであるが、彼はこの富に所得――購買力の源泉としての役割を與えることによつてその理論的因果關係を明らかにしようとしている。しかし「人間の資本價値」と富の市場價格による評價が實際問題として不可能であるため、賃金をとらざるを得なくなつている。ここまでくると stock としての人間の價値は flow としての賃金に置きかえられることになるが、どの程度までかかる置換が許されるかは疑わしい。彼の所謂「正常時」とは一九三〇年代の世界的不況時までも包含し得るほど廣汎なものであろうか。又、市場價格による富の評價が不可能であるため、帳簿價格による資產の評價額を以て當嵌めを行つているが、この際割引率の問題が回避されてしまつている。理論的にはこれは市場利子率と同一の概念ではない筈であるが直接計測は不可能であり、兩者の關連を求めるには選擇理論に遡る必要があるであろう。又國民所得の中に占める勤勞所得の割合は年度毎に多少でも變化するものであるが、この事情を考慮するとき國民一人當りの富と云う様な計算法が妥當するか否か疑問であり、クロス・セクションの資料によつて類似の結果が得られるか否か計算して見る必要があろう。

（鈴木　諒一）

書評及び紹介

有澤廣巳編

『統　計』（毎日ライブラリー）

本書の意圖するところはそのあとがきに述べられている。卽ち、「最近實生活の上でも、また學問研究の上でも、統計についての關心が非常に高まつてきた。したがつて統計學に關連した專門書もずいぶん多く出版されるようになつた。しかし一概に統計學といつてもその範圍はかなり廣範にわたつているため、專門の分野によつては、內容に非常な相違がある。從來統計學という言葉で總稱されている學問には二つの系統がある。一つはもつぱら社會科學への利用を目的として社會科學の一部門とみなされているいわゆる社會統計學で他のひとつは純粹數學の分野から獨立した數理統計學と呼ばれるものである。なかでも、數理統計學は最近急速に進歩をとげ、その一般理論のほかに、これを基礎とした標本調査法や實驗計畫法などの分野を擴張するにいたつている。また數理統計學の發達は一方においては、從來社會統計學の根據となつている大量觀察とその記述的方法を批判し、推計的方法の優位を力說して推計學ないしは推測統計學の名稱のもとに、これを統計學の中心的理論に据えようとする傾向も濃まつている。したがつて現在統計學の專門書といつてもその立場あるいはその分野によつては非常な相違があるといつてよい。これらのなかには良書も多く、その專門の分野については十分にその知識を得られる書物も多い。しかし統計學について以上述べたような二つの分野を總合的にかつ系統的に初學者にわかりやすく說明している書物は現在まだ現われていない。每日新聞社出版局では統計學の初學者への入門書としてこの二つの系統をわかりやすく說明した書物を編みたいとの意向をもつた。しかしこの計畫は成功すれば初學者にとつては非常によい手引となるが、まだこのような內容を一册の書物に編んだ例もないし內容の統一という點からして不安が多い。このたび、それにもかかわらずこの書物の編集を引き受けたのは、統計學の初學者には、ぜひこういう書物が必要だと感じたからであり、さらにこれが契機となつて、今後多少でも社會統計學と數理統計學の交錯について一步を進めた書物の現われることを望んだからである。この書物では、以上の考慮にしたがつて、社會統計學と數理統計學に分けて系統的に說明をこころみることとした。第一章から第七章までは前者で第八章以下が後者の說明になつている。兩者を通じて用語の統一はできるだけ圖つたが、學問の性質上社會統計學と數理統計學相互において槪念の相違からくる差異は避け得なかつた。また各章ごとに說明者が異なつているので、立場や說明方法、說明範圍などについても多少の相違はあるが、分擔者の持ち味を尊重してしていて畫一化を圖ることをしなかつた。この意味では、この書物は今後もつと各分擔者のあいだに調整を圖る努力が必要であるかもしれない。」

この言葉から本書の目的とするところがわかるが、更に附加えれば、結局この每日ライブラリーのもつ性格についてふれなければならないであろう。この叢書は一般市民の敎養のためにつくられたものである。（このことは「每日ライブラリー」刊行に際してを讀めば明らかである。）從つて本書は普通の意味での敎科書ではない。初學者のためにといつてもそこにおのずから違いがでてくる。敎科書である場合はページ數の問題もあるが、平均値の計算とか、分散の計算とか、その具體的例について、或は種々の分布型についての說明と計算とかに大部分がさかれるのでいわゆる〝讀む本〟でない。數字と計算例が多くて文章の部分が少いから讀んだだけではよくわからず、又無味乾燥に落ちいる。敎科書としてはこの形式が最上であつたとしても、一般敎養の書としてはこの形式はいささかまずい。なぜならそれは〝讀む本〟〝讀まれる本〟でなくてはならないからである。途中で讀者を飽きさせてはその目的にそわないことになる。從つてはんざつな數字や計算はなるべくさけなければならない。純粹に學問的な書や高度に專門的な書でないかぎり、廣く讀まれることを目的とする書では讀んだだけでわかることと、讀者の興味をひきずつてゆくスタイルをもつことが必要條件である。

第一統計學を社會統計學と數理統計學とにわけることに問題があり、論爭のある所である。あとがきだけを讀むとなにか違つたものが二つあつて並列しているような感じをうける。しかしそこが又讀者の興味をそそる點かもしれない。

數人の分擔による執筆は一人の著者では得られないような廣範圍にわたる槪觀をうることができるが、一方逆に說明の簡略や立場の相違によつて、かえつて初學者に混亂を起す危險があるといえよう。

第一章　統計とその效用、第二章　統計學發達小史、で一九〇〇年のはじめ迄の歷史が述べられているがその最後に「このようにして統計の解析方法をその統計の基礎である集團の歷史性と客觀的構造とに無頓着に普遍的な形式でもつて解析方法一般として研究する統計學は生物學をはじめその他の自然科學の一つの研究方法として廣く用いられるにつれて著しく發達した。それは無條件に數理的方法を可能としたからである。そしてこの方向における統計學を數理統計學といつている。社會統計學と數理統計學とは二つのくい違つた環である。共通の部面もあるが、たがいに異つた獨立の部面もある。社會統計學では集團の大いさを知ることが不可缺の要件であるが、數理統計學では無限の集團を考えることもでき集團の大きさを知ることは問題でない。しかし社會統計學も統計の解析によつて集團を支配する法則（定量關係）を發見するための統計的方法を研究目的としているかぎり數理統計學の解析方法の研究とその目的を共通にしている。ただ前者にあつては解析の對象たる集團の社會的・歷史的性質によつて制約されるのである。兩者の關係について一定の限界を定めることはできない。また兩者を對立するものと考えることもできない。むしろ社會統計學は數理統計學より多くを取り入れることができるであろう。しかしその際、ただ社會統計學は自己の對象の性質を忘却して自主性を失うことがあつてはならないのである。」と述べられている。この點については先に述べた如く多くの論爭がある所であり、例えばこの文例からは社會統計學では無限母集團を考えないという樣にもうけとれる。第三章　統計方法の特徵、ここでは經驗科學の任務は偶然性のうちに存在する必然性をいかにして認識するかにあり、その任務を果すための三つの方法、

1　抽象方法（マルクス著「經濟學批判」序說を參照）
2　實驗方法（R・A・フィッシャー著「實驗の計畫」を參照）
3　統計方法

の一環をなすものであることが述べられている。第四章　統計の制度と組織。我が國及び國際的統計調査の機構が說明されている。ここまでが序論に相當する部分で次の第五章　統計調査から本論に入る。

第五章では實際の調査の方法とその際に生ずる誤差（單に誤りの意味で抽出誤差ではない）についてかなり詳細に述べられている。ここでは、(1)調査目的に適しない定義を用いた場合、例えば失業者の定義等、(2)リストの不完全なために起る誤差、(3)無回答による誤差、(4)回答誤差、測定誤差によるもの、例えば利害關係によつて回答がゆがめられる。知らないために生ずる誤差、自負心のために生ずる誤り、適當に答えるために生ずる誤り、誘導尋問になつたため、質問の不明瞭なために生ずる誤解、(5)標本誤差、(6)轉記誤り、集計違いがあげられ讀者は讀みながらいちいち思い當ることがあろう。又政治的目的によつて統計が加工されること、農業パリティー指數が農産物の公定價決定のため使用されているが米麥等を供出制度で全量買上げる以上その指數は農家にとつて重大である。始めパリティー指數をラスパイレス式で定める意向であつたが高くなりすぎるのでフィッシャー式に下げたこと等が示されている。

第六章　統計資料の分析、では度數分布、平均値、標準偏差、相關係數、移動平均の計算が示され、第七章　指數による分析では物價指數と數量指數が示されてこれは普通の教科書と大差ない。第八章　數理統計學の發展、ケトレーよりフィッシャーまでとネイマンよりワルドまでと二部に分れて（執筆者が違う）最近の統計學の發展のあとが歷史的に述べられる。本書の特色をなす部分といつてよいであろう。ケトレー、ゴールトン、K・ピアーソン、ゴセット、フィッシャー、ネイマン、E・S・ピアーソン、ワルドの名が表われ四三頁にわたつて述べられている。歷史の中でそれぞれの理論の一端を述べるため初學者にはわかりにくい點もあると思われるが、統計學の思想の流れをつかむ意味で數式にこだわらず讀めば有益であろう。

第九章　標本調査法。第五章では單に實際の調査例が示されただけであるが本章によつて任意抽出標本調査の解析が述べられる。第一〇章　實驗計畫法。圃場試驗の例を通して分散分析が述べられる。唯ここで感ぜられることは、本書では普通の書と違つて特に分布論としてまとまつて述べられた章がないので、勿論第九章の中で正規分布が第一〇章の中で χ^2（カイ自乘）、t、F 分布と假說の檢定について述べられているが、章の途中であり、いきおい說明も簡單となつて初學者にはわかりにくい點もあるのではないかと考えられ、第九章の前に一章を設けて、分布論としてまとめて諸分布の特性と假說檢定の考えを述べておいた方がより親切ではないかと思われた。第一一章　統計的品質管理法。ここでは品質管理の具體的技術よりも、一八〇〇年代のはじめより現在迄の品質管理の發展とその社會的意義が述べられている。讀者にとつては、はんざつな技術の解說よりもはるかに面白いであろう。

全體を通して廣範圍にわたる說明は一般市民の敎養の書として勿論有益であろうが、やや難解と思われる箇所もあるのでむしろ一應統計の敎科書を學んだ學生が休み等を利用して通讀すれば敎科書では見られなかつた面と知識とを得ることが出來一層の研究へ進む上にも非常に有益であろうと思われる。

（佐藤　保）

平田富太郎著

『社會政策論研究』

——社會政策と資本主義との關連を中心として——

經濟學說の研究には、二種類のものがあるといわれる。その一は在來の諸說を學派別、年代別に整理し、その特性を各學者の意圖に出來るだけ忠實に要約し、類型化しようとするものであり、他は研究者が一定の問題意識を持ち、各學者の業績の批判を通じてその生長發展の跡を辿ろうとするものである。しかし前者においてもその整理、類型化には何等かの基準が必要であり、また後者の問題意識といえども、その背景をなす社會の歷史的狀況との關連においてその妥當性が承認されることが望ましい。從つて本來の意味における經濟學史は、「經濟社會の歷史的に具體的な發展形態を確定し、經濟社會のそれぞれの發展段階に現われた代表的な經濟諸學說が、この發展段階によつて如何に規定されており、また經濟社會が一つの段階から他の段階に發展するにつれ、何故に甲の理論が崩壞して、乙の理論にそのところを讓らなければならなかつたか、という歷史的な事情を解明し、そうすることによつて、一般に、經濟理論の生成發展崩壞の理法を、與えうるのでなければならない」（杉本榮一著・近代經濟學史、一二頁）ともいわれている。戰後わが國の學界において社會政策の本質に關する論爭が活潑にとり交わされ、同時にこれら論爭の經過と、その背景をなす國外諸學者の說の系譜をあきらかにする學說史的研究にも、注目すべき進捗がみられるに至つた。社會政策の學說あるいは思想史に關する研究は、戰前より戰時中にかけて既に大河內一男、服部英太郎兩氏のすぐれた業績が築かれていたが（大河內著・ドイツ社會政策思想史・昭一一・再二六、服部著・ドイツ社會政策論史・上・昭二四）、戰後いわゆる大河內理論批判に關するむしろ前述の第二の學說史的立場に近い勞作としてはこの論爭の立役者の一人である岸本英太郎氏の「社會政策論の根本問題」（昭二五）をあげることができよう。ここに紹介しようとする早稻田大學教授平田富太郎氏の著作は、その前半は氏の戰時中におけるドイツ社會政策論史研究の成果を納めたものであるとはいえ、全般的には同じ問題意識につらなる數少い力作のひとつとみて差支えない。但しこれは岸本氏に比較すれば、むしろさきの第一の立場に近い敍述の形式を守りながらも、あえて杉本氏のいわゆる第三の立場にまで到達しようとする異常な努力がかたむけられているものといいうるように思われる。

著者はまずカール・ブリブラムの社會政策概念に對する三分類、即ち個人主義的社會政策、國家主義的（國民主義的乃至全體主義的）社會政策、及び階級主義的社會政策を引用し、この前二者は各々その奉ずる世界觀に相違はあつても根本的には現存社會體制の維持を目的とする協調理論であつて、第三の革命的な社會政策論とは區別されるべきことを指摘する。しかしいずれにせよ、前者は矛盾なき資本主義社會の出現、後者はより高度の未來社會の到來という一定の目的に接近する手段として社會政策を構想しようとする、いわば